

## 赤十字を創った人

### 赤十字の生みの親 「アンリー・デュナン」



*Henry Dunant*

1859年6月末のある日のことです。アフリカのアルジェリアで製粉会社を経営していた一人のスイス人青年が旅の途中、イタリア北部のカステリオネという小さな町にさしかかりました。それは自分の事業についての相談のために、フランス皇帝ナポレオン三世に会うためでした。青年の名前はアンリー・デュナンといました。

しかしデュナンがそこで見たものは、町の近くのソルフェリーノの丘で起きた大激戦により傷ついた悲惨な犠牲者の姿でした。手当されることもなく放置された負傷兵たち。鼻やあごを銃弾や剣でそぎ落とされたままうめく者。脳や内臓が飛び出したまま介護されることもなく、息絶えようとしている者。母親への最後の言葉を託しつつ死んでゆく者など、それは地獄絵さながらの光景でした。デュナンは「この人たちを放ってはおけない」と、村の婦人たちと力を合わせ、彼らの手当に奔走しました。「傷ついた兵士は、もはや敵でも味方でもない。一人の人間として大切にし、手当しなければ。」デュナンの思いに婦人たちも共感し、いつしか彼女たちは「みんな同じ兄弟です」と口々に叫ぶようになりました。しかし、手当てをする人がまったく足りません。40,000人の負傷者に対し、わずかの軍医がいるだけなのです。負傷したある軍曹は、「もっと早く手当をしてくれれば、生きられたのに…」と悔しそうな声を発しながら息絶えてゆきました。

やがてジュネーブに帰ったデュナンは、この時の負傷兵の悲惨な姿が心から離れませんでした。もし、あの時、もっと良い救護組織が準備されていたら、もっと多くの兵士が助かったに違いない。デュナンは、その思いから「ソルフェリーノの思い出」という本を書き、その中で平和な時から戦争に備えて各国に救護組織を作っておくことと、その活動を保護するために国際条約を結ぶことを訴えたのです。

この本を読んだヨーロッパの多くの国々の人々がデュナンの主張に関心を持ちました。いままでは「戦争の最中にそんなことができるはずがない」と誰もが考えていたのです。

「ああ、無情」を書いたフランスの作家ビクトル・ユーゴーは「あなたこそ、人道を守り、

自由のために尽くす人です」と賞賛の言葉をおくりました。人々はこの本により「戦争の犠牲者を救うことができるかもしれない」と考え始めたのです。

そうした人々の中でも特に熱心な人々が集まり、デュナンの夢を実現するために五人委員会を創り、活動を始めました。

《アンリー・デュナンの提案を実現するため、1863年2月9日設立された「五人委員会」》



アンリー・デュナン

アンリー・デュフル

ギュスターブ・モワニエ

デオルド・モノワール

ルイ・アッピア

しかし、デュナンの考えに反対する人もいました。クリミア戦争でイギリス兵の看護に献身したナイチンゲールでさえ「そうした活動はボランティアの仕事ではなく、国家の仕事です」と手紙をよこしました。

デュナンは自らフランスやドイツ、オーストリアなどの国々への旅に出かけ、政府を説得して回りました。夜になると各国の偉い人たちに手紙を書き続けました。その旅は3000キロにも及びました。その中でデュナンは、自分の考えを良く理解してくれるオランダのバスティング将軍（陸軍軍医・博士）に出会いました。将軍と話すうちに、そうした活動はどちらの側にも味方しない中立の活動として国々に認めてもらうことが絶対に必要であることを確信したのです。しかし、そうした考えには彼の同士さえも「君は不可能なことを求めている」といって、まともに取り合ってくれませんでした。しかし、とうとうデュナンの願いが実現する日がきました。

1863年10月下旬、16カ国の代表がジュネーブに集まり、赤十字の創設のための規約が遂にできたのです。デュナンの説得の努力が実ったのです。翌年には12カ国の代表がジュネーブに集まり、負傷兵を保護し、看護するための世界で初めての国際条約であるジュネーブ条約が調印されました。これにより、国々に赤十字社が組織されるようになり、それまでよりもはるかに多くの負傷兵が救われるようになりました。人々は、会議場で目立たないように書記の仕事をしているデュナンを「人類の恩人」とたたえ、心からの拍手をおくりました。

しかし赤十字を創るために生活のすべてを費やしてきたデュナンは製粉事業に失敗し、破産してしまいました。委員会の委員もやめざるをえなくなりました。多くの借金を返せないため、「デュナンという男は、とんでもないヤツだ」という噂さえ流れました。ジュネーブを離れ、パリへと姿を消したデュナンは、人々のひどい言葉に傷つき、生活はどん底の貧しさになりました。下宿の家賃さえ払えず野宿をすることもあれば、衣類を買うお金もなく、シャツの襟が汚れるとチョークで白く塗って過ごすということもありました。それでもこの辛い日々は、自分が本当に不幸な人の気持ちがわかるようになるために、神様が与えてくれた試練ではないかと考えることもありました。苦しい日々を支えてくれたのは、遠くから自分のことを気遣ってくれる母からの手紙や贈物でした。

こうした日々の中でもデュナンは赤十字をさらによくするための活動をやめませんでした。イギリスでそのための講演をしていた時には、空腹の余り卒倒してしまいました。やがてデュナンの生活を気の毒に思った裕福なある夫人が支援を申し出ました。この善意によりデュナンは家や資金の援助を得ることができるようになったのです。人間の温かい親切がデュナンの苦しい生活にようやく、つかの間の光を投げかけたのでした。しかし、大きな借金と病気に悩まされていたデュナンの生活が順調に戻ったわけではありません。そしてデュナンは、療養のためスイスの山村に移り住むようになり、次第に人々から忘れ去られてゆきました。

それから10年近い年月がたったある日、スイスのハイデンという山村の病院を一人の新聞記者が訪ねました。記者は年老いて身よりもいない一人の老人が、実は赤十字を創ったアンリー・デュナンであることを知り驚きました。記者は、「人類の恩人ともいえるべき人をこのままにしているのでしょうか」と、赤十字の創始者のことを新聞で大きく紹介しました。その記事がきっかけとなり、人々は再びデュナンの偉業を思い出すようになったのです。そして1901年12月10日、世界で初めてのノーベル平和賞がデュナンともう一人のフランスの博愛家に贈られることになりました。

それから、9年後の1910年10月30日、人類の恩人アンリー・デュナンは病院のベッドの上で静かに息を引き取りました。

○ 元日本赤十字社組織推進部青少年課長 井上忠男著

○ 【光村図書株式会社「中学3年道徳」副読本「アンリー・デュナンの生涯」